OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『日本詩史」と『詩藪』との影響関係について
Author(s)	祁, 暁明
Citation	大阪大学言語文化学. 2007, 16, p. 95-110
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77872
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『日本詩史』と『詩藪』との影響関係について*

祁 暁明**

キーワード：日本詩史、詩藪、江村北海

本论文从日本诗话中选取了江村北海的《日本诗史》并以之为重点来展开论述，对有关的先行研究进行再检讨，对这部诗话是否从中国明代胡应麟的《诗薮》接受了影响这一问题进行重新认识。

具体说来，就是将《日本诗史》与胡应麟《诗薮》进行比较分析，在检讨了"气运说"的使用及编辑方式之后，笔者指出，《日本诗史》从《诗薮》所接受的影响微不足道。其理由是：

首先，江村北海《日本诗史》与胡应麟《诗薮》虽然都使用了"气运"一语，但"气运说"并不是胡应麟的独创，早在《诗薮》出现以前的宋末诗论中就有人运用同样的"气运说"来谈论诗文了。另外，距离《日本诗史》成立大约十年前刊行的芥川丹丘《丹丘诗话》的「序」中，就已经用了"气运"一语。因此，先行研究所主张的在"气运说"方面给《日本诗史》以影响的诗话主要是《诗薮》这种说法是不能成立的。

其次，《日本诗史》与胡应麟《诗薮》虽然都比较系统地记述了中国或日本的诗歌史，但从两诗话的编辑方式等方面来看，存在着显著的差异。因此，很难断言《诗薮》在这些方面对《日本诗史》产生过影响。

另外，笔者还将《日本诗史》的诗歌主张和胡应麟的诗论进行比较分析，指出《诗薮》的文学退化观与《日本诗史》的诗观在性质上是完全不同的。

先行研究认为，《诗薮》的特色在于，胡应麟论述了"气运"导致诗文历史变迁的必然性，并且详细叙述各种具体情形。先行研究还指出，这种"气运说"与王世贞古文辞派的复古理论不同，而与袁宏道性灵派的反复古论相通，更与《日本诗史》的"气运说"一脉相承。然而，笔者对两诗话各自的诗歌主张检讨的结果表明，《诗薮》在这方面对《日本诗史》产生的影响微不足道。其理由是：

首先，胡应麟《诗薮》的诗歌观点与王世贞复古派的诗论并无不同，与袁宏道的反复古主义诗论亦无相通之处。

其次，江村北海《日本诗史》对于胡应麟的建立在复古理论基础上的"气运说"并没有摄取，因而，两诗话的"气运说"并不相同。

* 关于《日本诗史》与《诗薮》的影响关系（祁晓明）

** 对外経済貿易大学専任講師

1．はじめに

日本における漢詩の歴史を述べた詩話の中では、江村北海（1707～1782）の『日本詩史』5巻がその代表である。それは近江朝の大友皇子から、江戸の明和年間に至るまでの漢詩の歴史、その間の主な詩人たちの略伝を年代順に記述するものである。

中国の明の時代の胡応麟（1551～1602）の『詩藪』20巻は、極めて体系的な明代の文学評論の専著であり、巨大な詩話書でもある。

大谷雅夫の「日本詩史解説」は、『日本詩史』と『詩藪』との影響関係について、次のように主張している。(1)両詩話の「気運説」について、『日本詩史』の徂徠論は『詩藪』の「気運」の語による歴史記述に触発されたものであった。(2)両詩話の表現形式について、文学史としての体裁をはじめとして、『日本詩史』が『詩藪』に負うものは大きい[1]。

しかし、(1)「気運」により詩文の歴史的変遷の必然を論じるというのは、『詩藪』の特色と言えるのか。『日本詩史』に影響を与えた「気運説」は、果たして『詩藪』なのか、という点に疑問が残る。(2)また、両詩話の編集方式は果たして一致しているのであろうか。大いに疑問である。本稿は以上の問題点をめぐって考察を行なう。

また、大谷雅夫は胡応麟『詩藪』の詩観は、王世貞の復古派の詩論と違って、袁宏道の反復古論に通じるものである[2]と主張している。

さて、『日本詩史』に影響を与えたと言われる胡応麟の『詩藪』は、一体、どのような史観を持つのか。復古論であろうか、反復古論であろうか。両詩話の史観を具体的に比較してみた上で、『詩藪』が『日本詩史』に大きな影響を与えたと言えるのであろうか。本稿では、江村北海と胡応麟の詩観の比較考察を通して、『日本詩史』と『詩藪』との影響関係を再検討してみる。

2．問題点の考察

2．1 「気運説」は『詩藪』の独創ではない

大谷雅夫の研究で、『詩藪』が『日本詩史』に大きな影響を与えたとする最も重要な根拠は、両詩話がともに「気運」の語[3]を用いて詩論を展開しているという点である。「日本詩史解説」に「『詩藪』は、確実に北海の著述に大きな影響を与えた……『詩藪』、その

---

[1] 清水茂編『日本詩史・五山堂詩話』岩波書店 1991 pp.600－603。
[2] 同上 p.602－603。
[3] 「気運」は、運命の意味であり、「気数」をもいう。『世説新語』の「傷逝」に「戴公見林法師墓、曰：徳音未遠、而拱木已積。冀神理綿綿、不與気運俱尽耳」とある。『三国演義』第6回に「漢東都洛陽、二百余年気数已衰」とある。また、「運会」すなわち時機の意味でもある。晋の羊祜の「譲開府表」に「身托外戚、事遭運会」とある。宋・元から清にかけて、多くの文人たちが用いた詩文論の用語とする「気運」は、文学体裁や文学思潮、風格を変える時代的勢いを指すものである。

内編と外編は明の万暦七年（1579）の刊行。『日本詩史』は明和八年（1771）刊。これも二百年にして「気運」が至ったと言えようか。」とある[4]。この論述から、『詩藪』の「気運」以外に『日本詩史』の「気運」に影響を与えたものはない、ということが読み取れる。

しかし、そもそも「気運」の語は、明の胡応麟の発明ではなく、宋・元から清にかけての多くの文人たちが用いた用語である。例えば、宋の沈括の『夢渓筆談・象数』に「小則人之衆疾、亦隨氣運盛衰。」（訳：小さいことでは、例えば人のいろんな病気も、気運につれて変化する。）とある[5]。元の戴良の『九霊山人房集』の「皇元風雅序」に「氣運有升降、人物有盛衰。是詩之變化、亦毎與之相爲於無窮。」（訳：気運には升降があり、人間万物には盛衰がある。故に詩の変化も、常に気運の升降と人物の盛衰とともに永遠に続いてゆく。）とある[6]。また、明の袁宏道の「與丘長孺」に「殆是氣運使然。」（訳：殆ど気運によるものである。）[7]とあり、同氏の「答梅客生開府」に「此自氣運使然、非才之過也。」（訳：時代の気運がそうさせるのが原因で、彼（蘇東坡）の才能とは関係ない。）とある[8]。袁中道の「宋元詩序」に「文章關乎氣運。」（訳：文章は、気運に関わるものである。）とある[9]。鍾惺の「詩帰序」に「詩文氣運、不能不代趨而下、而作詩者之意興、慮無不代求其高……操其有窮者以求變、而欲以其異與氣運争、吾以爲能爲異、而終不能爲高。」（訳：詩文の気運はやむを得ず時代が変われば変わるほど衰えていかざるを得ないものである……有限な方法で気運に反して異を求めれば、結局、異は得られるが、優れた発想は得られないのである。）とある[10]。また、清の趙翼の『甌北集』巻39に見える「題周松靄杜詩雙聲疊韻譜括略」と題する詩にも「從來文字緣、毎隨氣運開。」（訳：従来、文章の発生は、常に気運を伴なう。）とある[11]。銭謙益の『列朝詩集』の「丁集」6の「胡応麟小伝」には、「文章關乎氣運、不亦信乎。」（訳：文章は気運に関わるというのは、確かなことである。）と述べている[12]。

---

[4]『日本詩史・五山堂詩話』p.603. 日本詩話に対する中国詩話の影響については、日本の詩話は200年遅れて中国の詩話の流行に追いついたという見方がある。例えば、同書の揖斐高の「詩話大概」に「日本における詩話の名をもつ最初の著作は、五山の禅僧虎関師錬（1278～1346）の『済北詩話』である。『六一詩話』が作られてよりほぼ二百年後に当る。江村北海は『日本詩史』において、日本の詩文は二百年遅れて中国の詩文の流行に追随するという文学史的な見通しを述べたが、その通りの関係になっている」とある（pp.584－585）。大谷雅夫はまさにこの見方を取っている。しかし、このあくまでも推測に過ぎない「文学史的な見通し」で両詩話の「気運」を結び付けるということは、やはり疑問視せざるを得ない。

[5] 訳文は筆者による。

[6] 陶秋英編『宋金元文論選』人民文学出版社 1984 p.590. 訳文は筆者による。

[7] 蔡景康編『明代文論選』人民文学出版社 1993 p.324. 訳文は筆者による。

[8] 銭伯城校『袁宏道集箋校』中、上海古籍出版社 1981 p.750. 訳文は筆者による。

[9]『明代文論選』p.335. 訳文は筆者による。

[10] 同上 pp.355－356. 訳文は筆者による。

[11] 郭紹虞『中国歴代文論選』第3冊、上海古籍出版社 1980 p.498. 訳文は筆者による。ここにある「文字」は、「文章」という意味で使われている。孫卓の「同宋薬州太史登藤王閣」詩に「子安文字当時体」とある。「縁」は、仏教の用語で、ものごとの生ずる原因を指す。唐の湛然の『止観輔行伝弘決』巻1に「親生為因、疎助為縁」とある。

[12] 周駿富編『列朝詩集小伝』台北明文書局 1991 pp.486－487. 訳文は筆者による。

こうした「気運説」は、江戸時代の他の漢学者に影響を与えているのである。松村九山（1734～1822）の『詞壇骨鯁』に「且ツ夫レ文章ハ氣運ニ關ルモノナリ。」とある[13]。また、宝暦元年（1750）に刊行された北海の友人、芥川丹丘（1710～1785）の『丹丘詩話』に見える岡白駒の「丹丘詩話序」が、既に「気運」の語によって詩文の変遷を論じている。「詩者、天地元聲、誠非虚論。雖然、運数互移、情變應之、三代之温厚、漢魏之高華、六朝之麗縟、三唐之整秀、咸臻厥美、此蓋元聲之秀發也。夫天地之大、莫不有焉、腐宋胡元、亦氣運之偏至、皆不外於元聲也。」（訳：詩は、人の感情を自然に表現するものであるという説は、確かにその通りである。ところが、感情を表現するということは、時代の変遷に応じても変わるのである。趣き深いと評される三代の詩や、上品で、華麗であると評される漢魏の詩、こまやかな描写で、美しく情趣あふれる言葉使いも多いと評される六朝の詩、整然で、優れて麗しいと評される三唐の詩など、これらが高い水準に到達した原因は、詩人の感情を自然に表現したということにある。しかし、どの時代もいろいろな詩があるわけで、たとえ古臭い宋の詩と下品な元の詩でも、気運による現われた詩風の一つであり、感情を自然に表現するという点では前代の詩のそれとは相違ない[14]。）

大谷雅夫でも「気運」の語を用いた詩論は『詩藪』に限らず、ほかにもいくつかあることを認めている。しかし、それらの「気運」の語は「文章の盛衰そのものではなく、それを結果としてもたらす世運の興廃を意味するように見える。」と指摘する。その例として、楊維楨などの元代の詩論を挙げ、『詩藪』「外編」巻5（宋）にある「気運」[15]と比較している。そして、『詩藪』に見える「気運」は、「時の政治状況に直接関わるよりも、むしろ、より抽象的な時の勢い……「時」と「勢」に近い語意となってはいまいか。それは天道に属して、人為の領域を超える力である。個々の詩人の努力によっては動かすことの出来ない、むしろ個々の詩人の詩作を大きく支配する時代の力である。」、「「気運」……の具体相を詳述するのは『詩藪』の特色であった。」などと述べている[16]。

しかし、大谷雅夫があげた元代の詩論に限って見ても、上述の『詩藪』の「気運」と極めて類似しているものもある。それは、劉将孫[17]の『養吾斎集』に見える「須渓先生集序」という一文である。

---

[13] 中村幸彦『近世文学論集』岩波書店 1966 p.490。
[14] 池田四郎次郎『日本詩話叢書』巻2,文会堂書店 1920－1922 p.553. 訳文は筆者による。「麗縟」は、「靡縟」をもいい、言葉が華麗で、描写も細かいことを指す。王充の『論衡』「佚文」に「繁文麗辞、無上書文徳之操」とあり、また『周礼』「春官・大宗伯」の鄭玄の注に「文有麤縟耳」とあるが、この「縟」の語意について、賈公彦の「疏」では「細也」と解釈する。
[15] 『日本詩史・五山堂詩話』pp.601－602。
[16] 同上 pp.602－603。
[17] 劉将孫、宋末の人、生没年未詳。字は尚友、号は小須。宋の詩人の劉辰翁（1232～1297 字は会孟、号は須渓）の息子。

この文章の中で、作者は、劉辰翁が文壇に功績を残したことについて、このように述べている。「詞章翰墨自先生（劉辰翁）而後、知大家數筆力情性、盡掃江湖晩唐錮習之陋。雖發舒不昌、不能震於一世之上、如前聞人（韓愈、欧陽修、蘇東坡）、而家有其書、人誦其言、隠然掖流俗心髄而洗濯之、於以開将來而待有作。」（訳：須溪先生の努力によって、当時の文人たちは初めて韓愈、欧陽修、蘇東坡のような名人の詩文の風格特色などを知り、晩唐の詩を尊ぶ江湖詩派の文壇に長引く悪気風を一掃しようとした。たとえ、前代の韓愈らのように、一世を揺るがし、文壇に強い影響を及すことがなかったとはいえ、当時、先生の書はだれもがよく知っており、人々の思想に対して目に見えない影響を及ぼしている。こうした先生の努力によって、これ以後の文壇の気風の変革に大きな期待をよせるに至っていると思われる[18]。）

そして、唐の韓愈の仏、道排斥と宋の欧陽修の西崑体反対など、世間において多大な評価を受けたことにより、劉辰翁のそれらと比較している。「佛老、人知其爲異端也。西崑體、世之所謂時文也。未有若學問之平沈、而文字之瀾倒也。且視韓歐所遇爲何如哉？而振拔一時至此。則先生之文、豈不有關於氣運、力難而功倍。而其不幸、則可感者在是矣。」（訳：人々は仏教、道教の正統でないことを知らなかったわけではないし、西崑体の詩でもただ一時に流行したものに過ぎない。学問、文章がそれらの悪影響によって滅んでしまうことはなかった。それに、先生は韓愈、欧陽修のような朝廷の官僚でもなかった。にもかかわらず、よくあんなに立派な人間になった。そういう意味では、先生の文章も、気運に関わるものではないか。先生の努力は、韓、欧よりさらに大きく、その成果も計り知れない。この点では、先生の不幸を感じられると思う[19]。）

つまり、劉辰翁の努力したこととその成果は韓愈、欧陽修のそれらより、いくら素晴らしくても、いくら大きくても、生きている時代が違う[20]以上、韓愈、欧陽修のような高い評価は得られない。この不幸の原因は気運にあるではないかと述べている。ここで、劉将孫のいう「気運」は、まさに「天道に属して、人為の領域を超える力である。個々の詩人の努力によっては動かすことのできない、むしろ個々の詩人の詩作を大きく支配する時代の力」である。

言い換えると、劉将孫は、胡応麟より何百年も前に『詩藪』と同じく「気運」の語を

---

[18]『宋金元文論選』p.548．訳文は筆者による。「家數」は、学術或は芸術の流派を指すものである。兪正燮『癸巳存稿』巻の12に「古人学行皆称家数」とある。「江湖」は、「江湖派」の略称であり、宋代の戴復古、劉過を代表とする晩唐の李商隠を尊ぶ詩の流派である。

[19] 同上。訳文は筆者による。「西崑体」は、北宋の初期に流行している詩風であり、楊億らはその代表者である。「時文」は、現時に流行している文体である。「瀾倒」は、衰落の意味を指す。韓愈の『進学解』に「障百川而東之、回狂瀾於既倒」とある。「遇」は「君臣遇合」の意味で、官僚になることを指す。『史記』の「佞幸列伝序」に「善仕不如遇合」とある。

[20]「須溪先生集序」に「先生登第十五年、立朝不満月、外庸無一考。当晦明絶続之交」とある。

使って詩文の変遷を論じているのである。

とすれば、「気運」の語を使うことは、『詩藪』独自の特色とは言えないので、『日本詩史』が『詩藪』に負うものは大きいという主張は、やはり成立しにくいと思われる。

2．2　編集方式の違い

大谷雅夫は『日本詩史』は『詩藪』に影響を受けたものであるとする理由は、「文学史としての体裁」において、両詩話はともに詩の歴史を叙述する作品であるとあげた点にある。つまり、『詩藪』は宋代以来つぎつぎの詩話の中で、初めて詩の歴史を体系的に記述したものであることに対して、『日本詩史』は日本文学史上において初めて文学の歴史をふまえた詩話である、という点で両者の類似するところがある。

しかし、宋代以来の詩話書の中で、詩の歴史を体系的に記述する詩話書は、『詩藪』のみではない。

例えば、宋の魏慶之の『詩人玉屑』20巻は、すでに『詩藪』のように、古今体に関する詩体別、周・漢・六朝・唐・宋の歴代詩に関する時代別の詩史を記述している。例えば、

『詩人玉屑』の目次	『詩藪』の目次
巻之12　品藻古今人物　古詩　律詩　絶句	内編　巻1　古體上(雑言)　巻2　古體中(五言)
巻之13　三百篇　楚詞　両漢　建安　六代　靖節	巻3　古體下(七言)　巻4　近體上(五言)　巻5　近
巻之14、15、16　謫仙……晩唐(唐)	體中(七言)　巻6　近體下(絶句)
巻之17、18、19　西崑體……中興諸人(宋)	外編　巻1　周漢　巻2　六朝　巻3　唐上　巻4
巻之20　禪林　方外　閨秀	唐下　巻5　宋　巻6　元

詩話の編集体系から見ると、両者の類似点がある。また、『詩人玉屑』のほかにも、宋の葛立方の『韻語陽秋』20巻、劉克荘の『後村詩話』14巻、何汶の『竹荘詩話』24巻なども、漢魏の時代から宋代まで、詩人の年代の順に編纂されている。

一方、『日本詩史』は、詩体別という叙述方法を取ってない。例えば、

『日本詩史』の「凡例」
五巻の中、初巻は中古近古の朝廷の文学、簪纓の辞藻を商推す。白鳳の時より始めて、慶長の末に訖る。二巻は初巻の緒余、その論載する所、武弁と為し、医と為し、隠と為し、釈氏と為し、閨閤と為す。年代上に同じ。ただ閨閤多く得べからず。則ち近時も亦た附す。第三巻は元和以後の京師の藝文を論述し、兼ねて他州に及ぶ。第四巻は東都、兼ねて他州に及ぶ。第五巻は第三・第四両巻の緒余、諸州に論及す。

『詩人玉屑』や『日本詩史』も、詩の作者を「禅林、方外、閨秀」のような職業別の叙述方法を取っている。この共通点から見ると、叙述の面においては、『日本詩史』は

『詩人玉屑』に触發された可能性もあると言える。実際、『詩人玉屑』は早くも正中元年（1324）に日本に渡来した。『日本古典文学大事典』の「詩人玉屑」の条に「わが国へは鎌倉時代の末に渡来した。正中元年（1324）二月下旬に玄恵法印が「批点句読」を施した（五山版奥書）のは、渡来後間のない頃の事らしく『花園院天皇宸記』には、その翌年の一二月二八日の条に「近代有新渡書、號『詩人玉屑』、詩之腦髄也。」と記されている。」とある[21]。とすれば、江村北海が『詩人玉屑』を読んだことも十分考えられる。

また、詩話の形式から見ると、『日本詩史』は「漢詩選集」を取っている。中国では、この形式を「別裁集詩話」と称する。南宋の何汶の『竹荘詩話』、蔡振孫の『詩林廣記』、逸名の『聯珠詩格』、元の方回の『瀛奎律髄』などは、いずれも「漢詩選集」の詩話書に属する。この点から見ると、詩話の形式においては、『日本詩史』は詩の選集を主な特色とする『瀛奎律髄』などと極めて類似している。また、松村九山の『木石園詩話』によると、『聯珠詩格』と『瀛奎律髄』は、延宝・天和（1673～1684）の頃、かなり普及していたことがわかる[22]。

とすれば、『瀛奎律髄』などの漢詩の選集を特色とする中国詩話は、『日本詩史』に影響を与たことも十分考えられる。

一方、『詩藪』は、「別裁集詩話」ではなく、漢詩研究者を対象とする「詩論型」の詩話である。明の時代に多く作られた詩話書、例えば、王世貞の『藝苑卮言』や王世懋の『藝圃擷餘』、徐禎卿の『談藝録』などは、いずれも「詩論型」の詩話書に属する。日本詩話の読者層の多くは、漢詩の初心者であるので、『日本詩話叢書』を見て分かるように、『詩藪』のような「詩論型」の詩話は日本詩話の主な形式ではない。また、叙述の面において、『詩藪』は『日本詩史』のように、詩人たちの略伝を記述することはしない。

大谷雅夫の『日本詩史』は『詩藪』に負うものは大きいと論じた根拠は、詩の歴史を叙述するだけではなく、「気運」の具体相を詳述するという点にあると思われる。

しかし、この点から見ても、両者の違いが見られている。

『日本詩史』の中で、詩の体裁を論じている場合、ほとんど「気運」の語を使っていない。例えば、「凡例」に「この編に論載する所の詩、大率近体、絶えて古詩に及ばざるものは、中古の朝紳の詠言、近体には間録すべきもの有るも、古詩に至りては殊にその旨を失ふ。元和以後、作者輩出し、近体の詩実に中土の作者に追歩せんと欲す。ただ五言古詩は未だその面目を得ず。謖園諸子の文集、その首必ず多く楽府擬古の諸篇を載

---

[21] 大曽根章介編『日本古典文学大事典』明治書院 1999 p.563。
[22] 『日本詩話叢書』巻7、pp.518－519に「至延天之際、宋詩盛行、瀛奎律髄、聯珠詩格、幾於家有其書矣」とある。

す。然れども余を以てこれを論ずれば、尚ほ議すべきもの有り。」とある[23]。

また、『日本詩史』にある「気運」という語は、あくまでも詩壇の趨勢、あるいは文学思潮を論じる用語であり、詩の体裁の変遷を論じているわけではない。例えば、『日本詩史』巻2に「五山禅林の詩、固より論じ易からず。蓋し、古昔の文学、弘仁・天暦に盛んに、延久・寛治に陵夷し、保元・平治に泯没す。ここに於て世に所謂五山禅林の文学、代りて興る。亦た気運盛衰の大限なり。」とあり、また、巻3に「余謂ふ、この時物徂徠古文辞を関東に唱へ、明の李于鱗、王元美を称揚す。軽俊の子弟靡然として争ひ従ふ。然れども京師には未だその説を為すもの有らず。今滄州の詩を誦すれば、駸駸乎として明人の声口なり。蓋し、気運の鼓す所、作者も亦たその然るを知ること莫くして然るなり。」とある。さらに、巻4の「徂徠論」が用いる「気運」という語は、あくまでも詩壇の趨勢、あるいは文学思潮を意味する。例えば、六朝・初唐の綺靡、中唐（元稹・白居易）の平易、宋・元の素朴、明の擬古などは、いずれもがかつて中国で流行した一時代の文学思潮である[24]。

巻4の「徂徠論」に「詩体は毎に気運に随いて遞遷す。」とあるが、しかし、ここにある「詩体遞遷」という論は、同巻の「梁景鸞論」に見える「詩体屡変」の論と同じように、あくまでも詩の風格、あるいは、詩壇の趨勢についての論であり、詩の体裁についての論ではない[25]。また、「徂徠論」は、徂徠詩の「二体」について「瘦勁雄深」または「高華」と論じている[26]。一見で分かるように、ここでいう「詩体」は、詩の風格を指すものに違いない。とすれば、『日本詩史』には、「気運」の語を用いて詩の体裁の変遷を論じることはほとんどない[27]と言える。

一方、『詩藪』は、詩の体裁（いわゆる「体」、詩の形式を指したもの）の必然的な変化を論じる場合、常に「気運」の語を用いる。

例えば、『詩藪』「内編」巻1では、「氣運推移」（訳：気運の移り変わり）の具体例として、詩の体裁的変遷を挙げている。「四言變而離騒、離騒變而五言、五言變而七言、七言變而律詩、律詩變而絶句、詩之體以代變也。」（訳：四言詩が変じて離騒となり、離

---

[23] 『日本詩史・五山堂詩話』p.43。
[24] 同上 p.75、p.98、pp.124－126。
[25] 同上 p.507 に「余按蛻岩詩体屡変、為唐、為宋元、為初明、為七子、為徐文長、為袁中郎、為鐘譚」とあるように、蛻岩の「詩体」の「唐、宋元、初明、七子、徐文長、袁中郎、鐘譚」への移り変わりは、「徂徠論」に見える「詩体」の「三百篇、漢魏六朝、唐宋元明」への「遞遷」と同じように、詩の体裁についての論ではない。「唐宋元明」や「七子、徐文長、袁中郎、鐘譚」などは、詩の体裁を意味するものではないからである。大抵、詩の体裁を論じる場合、「三百篇（四言）、楚詞（騒体）、楽府（雑言）、古体（五言）、近体（律詩、絶句）」というような並べ方が普通である。
[26] 同上 p.509 に「余按徂徠詩有二体。初年作瘦勁雄深、后来影響李王、勤作高華之言」とある。「瘦勁雄深」や「高華之言」などは、決して、詩の体裁についての論ではない。
[27] 「徂徠論」は「五言四韻」には少し触れたが、それは、中国の斉、梁、陳、隋の影響を受けた文武天皇時代の詩壇の気風を意味しており、『詩藪』「内編」のように、詩の「古体」から「近体」への体裁的変遷を論じるわけではない。

騒が変じて五言詩となり、五言詩が変じて七言詩となり、七言詩が変じて律詩となり、律詩が変じて絶句となる。時代が移り変わるにつれて詩の体裁も変化する[28]。）

また、『詩藪』「内編」巻４に「五言律體、兆自梁、陳。唐初四子、靡縟相矜、時或拗澀、未堪正始。神龍以還、卓然成調、沈、宋、蘇、李、合軌於先、王、孟、高、岑、並馳於後。新製疊出、古體攸分、實詞章改變之大機、氣運推遷之一會也。」（訳：五言律詩という体裁は、梁、陳の時代に新しくできたたものである。初唐四傑は、こまやかな描写や豊富な言葉使いで競い合い、それを美とした。しかし、中には律詩の規則に従わないものも偶にあるので、初めて作られた標準的な五言律詩とは言えない。周の神龍年以来、五言律詩は抜群で、整然としたものである。沈佺期、宋之問、蘇味道、李白は先に律詩の規範に合うものを作り出し、のちに、王維、孟浩然、高適、岑参は、各人のそれぞれの五言律詩を作った。律詩という新しい体裁は、このうちつぎつぎと生み出され、古詩と律詩とを見分けられるようになる。その時期は、実に詩文変遷の重要なきっかけであり、気運の移り代わりの転機である。）とある[29]。

つまり、『日本詩史』が用いる「気運」（詩壇の趨勢・文学思潮）という語は、『詩藪』「気運説」の主な内容である「体」（詩の体裁の必然的な変化、更新）とは異なっている。端的に言えば、両詩話では、「気運」の語が異なる意味で使われている。

以上の考察から、「文学史としての体裁」という点で、『日本詩史』は『詩藪』に関係するものは大きくないと言わざるを得ない。

２．３　芥川丹丘の影響

江村北海は『日本詩史』では『詩藪』に言及せず、彼の別著『授業編』でも『詩藪』の名を挙げるに止まっている。大谷雅夫は『詩藪』が『日本詩史』に影響を与えた根拠の一つに、北海の友人である芥川丹丘（1710 ～ 1785）の『丹丘詩話』が『詩藪』を褒めている点を挙げる。「享保三年（1718）に和刻出版され、北海の友人の芥川丹丘がその唐詩の評論を「的白精確、以て加ふる無し」（丹丘詩話）と論じ、『授業編』にも書名を挙げられる『詩藪』は、確実に北海の著述に大きな影響を与えた。」[30] 江村北海は芥川丹丘を通じて『詩藪』の影響を受けたというのである。

しかし、芥川丹丘の『丹丘詩話』巻下の『詩藪』に関する記述は、実は次のようであ

---

[28] 胡応麟『詩藪』（以下『詩藪』と称す）中華書局上海編輯所 1962 p.1. 訳文は筆者による。
[29] 『詩藪』p.58. 訳文は筆者による。「唐初四子」は、王勃、楊炯、盧照隣、駱賓王のことを指す。「初唐四傑」をもいう。「拗澀」は、言葉の使い方がかたくて、読みにくいことを指す。袁枚の『隋園詩話』巻の７に「北魏繆襲倣其体、作尤射経、拗澀不可読、殊覚無味」とある。「神龍」は、周（紀元 705）の則天武后の年号である。「会」は時機の意味である。『後漢書』の「周章伝論」に「将従反常之事、必資非常之会」とある。
[30] 『日本詩史・五山堂詩話』p.603。

る。「胡元瑞、唐詩を評論する、的白精確、以て加ふる無し、但、明人に於て頗其の好む所に阿る、與奪實に過ぐ、後學慎んで之を簡擇して可なり。胡元瑞、毎に濟南を抑へて琅琊を揚ぐ、……之を要するに、一隅に偏重す、論篤に非るなり。」[31]。

芥川丹丘が『詩藪』の欠点や片寄りへの指摘も行なっているのであり、決して一方的に褒めているわけではない。しかも、後学にこの『詩藪』の詩論を慎重に選択すべきであると言っている。

実際、芥川丹丘が最も褒める中国詩話は、宋の厳羽の『滄浪詩話』であり、その次が陳師道の『后山詩話』である。「古今の詩話、唯、嚴儀卿が滄浪詩話、千古の公案を斷ず、儀卿自稱す、誠に誣ひざるなり。其他歐陽公の六一詩話、司馬温公詩話の類、率ね皆一時の談柄に資するのみ、詩學に於て實に干渉なし、初學之を畧して可なり。滄浪詩話の外、畧、取る可き者は、陳師道の后山詩話、其の識、上乘に非ずと雖、其の論時に妙悟に入る、故に高廷禮の品彙、多く之を収む、詩家最讀まざる可からざるなり。」[32]。

以上のように、芥川丹丘が最も褒める詩話書の中には、『詩藪』の名は見えないのである。

とすれば、江村北海が芥川丹丘から受けた影響については、『詩藪』に対する批判や指摘も含めて考えるべきであろう。

2．4　両詩話の文学史観の違い

大谷雅夫は『詩藪』の文学史観について、「それはむしろ、古文辞派の復古の主張を批判する性霊派の文人袁宏道（1569～1610）の論、すなわち唐から宋への詩風の変遷は「殆ど是れ気運の然らしむ」るものであり、「古へ何ぞ必ずしも高からん、今何ぞ必ずしも卑からん」（丘長孺）と論じる反復古の議論に通じるものなのである。」と主張している[33]。

さて、『日本詩史』に影響を与えたと言われる胡応麟の『詩藪』は、一体、どのような史観を持つのか。復古論であろうか、反復古論であろうか。両詩話の史観を具体的に比較してみた上で、『詩藪』が『日本詩史』に大きな影響を与えたと言えるのであろうか。

大谷雅夫は、胡応麟の文学史観は反復古の議論に通じるものであると主張している。その根拠は、『詩藪』は「気運」（抽象的な時の勢い）により詩文の歴史的変遷の必然を論じ、その具体相を詳述するということにある。

---

[31]『日本詩話叢書』巻2, p.619。
[32] 同上巻2, p.606。
[33]『日本詩史・五山堂詩話』p.602－603。

しかし、それだけでは、『詩藪』の文学史観は反復古論に通じると言いえるのか。

事実、復古論を唱えた後七子[34]の謝榛（1495～1575）も、詩文は詩体・文風を変遷させる「時の勢い」に従うと論じているが、復古論の立場であることは変わらなかった。例えば、『四溟詩話』巻1に「三百篇直寫性情、靡不高古、雖其逸詩、漢人尚不可及。今學之者、務去聲律、以爲高古。殊不知文隨世變、且有六朝唐宋影子、有意於古、而終非古也。」（訳：詩経においてその優れた点は、人の感情をうまく表現しているところにある。たとえ詩経の散逸した作品と雖も、後の漢代の詩人らはそれに勝ることはできない。現代の詩経を倣う詩人らは、専ら詩から平仄と韻律を除ければ、詩経のような作品を作ることも可能であろうと考えている。それは要するに、彼らが文章は時代につれて変化するということをまったく知らないと言える。六朝や唐、宋の詩を念頭に置いた以上、作為して専ら詩経に倣ったとしても、とても詩経のような作品を作れない。）とある[35]。

また、復古論の代表者である王世貞の『藝苑卮言』にも、「気運説」と極めて類似する論述が記されている。『藝苑卮言』巻4では、文章の循環的な盛衰を論じ、「此雖人力、自是天地間陰陽剥復之妙。」（訳：これは人為、人力によるものとは言え、自然の不思議な盛衰、消失も考えられる。）という[36]。これは、まさに大谷雅夫が定義した、いわゆる「世運の興廃を意味せず、時の政治状況に直接関わりなく、天道に属して、人為の領域を超える力であり、個々の詩人の努力によっては動かすことのできない、むしろ、個々の詩人の詩作を大きく支配する時代の力」である。

とすれば、「時勢」により詩文の歴史的変遷の必然を論じるだけでは、反復古論かどうかの見分けがつかないではないだろうか。

復古論と反復古論との違いは、後世の詩文は前の時代の詩文に勝るものであるか否かということで見分けられると思う。まず、復古論の根拠となった理論は、その文学退化観であると言える。それに対して、反復古論は文学進化論を唱えたのである。この点から見ると、胡応麟の詩文観と言えば、やはり文学退化観、すなわち、後世の詩文は前の時代の詩文に勝るものではない、という見方が挙げられる。

例えば、『詩藪』「内編」巻1に「四言變而離騷、離騷變而五言、五言變而七言、七言變而律詩、律詩變而絶句、詩之體以代變也。三百篇降而騷、騷降而漢、漢降而魏、魏降而六朝、六朝降而三唐、詩之格以代降也。」（訳：四言詩が変じて離騒となり、離騒が変

---

[34]「後七子」は、明の嘉靖、隆慶時期に活躍した文人李攀龍、王世貞、謝榛、宗臣、梁有誉、徐中行、呉国倫のことである。

[35] 丁福保編『歴代詩話続編』下、中華書局 1983 p.1137. 訳文は筆者による。「高古」は上品であることを指す。白居易「與元九書」に「以康楽之奥博、多溺於山水。以淵明之高古、偏放於田園」とある。

[36]「剥復」は、世の浮き沈み、或は消長を指す意味である。『宋史』の「程元鳳伝」に「極論世運剥復之機」とある。訳文は筆者による。

じて五言詩となり、五言詩が変じて七言詩となり、七言詩が変じて律詩となり、律詩が変じて絶句となる。時代が移り変わるにつれて詩の体裁も変化する。詩経が降りて離騒となり、騒が降りて漢の詩となり、漢の詩が降りて魏の詩となり、魏が降りて六朝の詩となり、六朝の詩が降りて三唐の詩となる。時代が移り変わるにつれて詩の風格も退化する。）とある[37]。

このことから分かるように、「詩之體以代變也。」（訳：時代が移り変わるにつれて詩の体裁も変化する。）という点では反復古論と類似するが、「詩之格以代降也。」（訳：時代が移り変わるにつれて詩の風格も退化する。）という点では、時代の変遷につれて詩は逆に劣っていくと主張している。

また、胡応麟は、「詩至于唐而格備、至于故宋而體窮。」（訳：唐代に至ると、あらゆる詩の風格をかね備えていた。宋代に至ると、今日の詩の体裁が出来上がっていた。）と論じ、たとえ明詩を作ろうとしても、前代の唐詩・宋詞・元曲に勝ることはなく、それより漢魏・盛唐の詩を理想として復古を唱えたほうがよいと主張している。「明不致工於作、而致工於述、不求多於専門、而求多於具體、所以度越元宋、苞綜漢唐也。」（訳：明の詩人らは、独特の文学体裁、風格を作り出すことではなく、古人の優れた文学遺産を受け継ぐことに力を注いた。また、独自のものを作り出すことではなく、意欲的に多くの古人の優れた作品の影響を受けていった。このことから、美を求めるのである。そうすることによって、元曲・宋詞の水準を超え、漢・唐の詩のレベルを備えることはできたのである。[38] ここで胡応麟は、「後世の詩は前の時代の詩に勝るものではない」ということを復古論の理由としている。

これについて、蔡振楚の『中国文学批評史』は「復古、是胡（應麟）氏論詩的真諦所在。」（訳：胡応麟詩論の真の意味は復古二字にある。）と指摘している[39]。

また、霍松林は、「胡應麟……在『變』的理論上建立他的復古論。在他看来、『三百篇降而……唐』、『變』是『變』了、卻越『變』越壊、所以主張『取法欲遠』。」（訳：胡応麟は……「変」の理論の中で復古論を唱えている。彼から見れば、「詩経が降りて……唐の詩となる。」詩体・詩風は変わるには変わるが、変われば変わるほどかえって悪くなる。それ故に、古代の詩文を学ぶべきだと主張するのである。）と指摘する[40]。

---

[37] 『詩藪』p.1.ここにある「格」は「格調」を指すものであり、文章の風格を意味する。劉壎の『隠居通議』「詩歌五」に「今詳格調句法、甚類生前之作」とあり、また、戴名世の「『野香亭詩集』序」に「即有一二能者、不過指摘声病、講求格調」とある。訳文は筆者による。

[38] 同上「内編」巻1、訳文は筆者による。「述」は、前人の定説を述べて明らかにすることであり、「作」は、創作の意味である。『論語』「述而」に「述而不作」とある。「多」は、推重、賛美の意味である。『漢書』の「灌夫伝」に「士亦以此多之」とある。

[39] 蔡振楚『中国文学批評史』中華書局 2005 p.278. 訳文は筆者による。

[40] 霍松林校『原詩』人民文学出版社 1979 p.2. 訳文は筆者による。

また、郭紹虞の『中国文学批評史』は、「『詩藪』中論詩主變的話、觸目皆是、不可勝舉……似乎與前後七子的理論也站在反對的立場了。然而不然……他一方面承認體以代變、一方面卻指出格以代降……一般反對復古論者都以「變」爲中心、而他卻於變的理論上建設他的復古論。」（訳：『詩藪』では、詩の変化を主張しているところは非常に多い。……これらの論述から、胡応麟は前後七子の復古論に反対の立場に立っているように思われるが、実はそれとは異なる。……彼は詩の体裁は時代につれて変化すると是認すると同時に、詩の風格は前の時代より衰えて行くと主張している。……一般に反復古派の論説は、ほとんど「変」の理論を中心とする。しかし、胡応麟は彼らと異なり、「変」の理論の中に復古論を立てる。）と指摘している[41]ように、胡応麟の詩論は、反復古派と似ているところがあったとは言え、実質的には復古論である。

私見では、王世貞の『藝苑卮言』に「気運」の語が見えなくても、胡応麟が王世貞の文学退化観に背いたわけではない。

以上の『詩藪』の論を性霊派の袁宏道の反復古論と比べてみよう。

袁宏道の「江進之」に「張、左之賦稍異揚、馬、至江淹、庾信諸人、抑又異矣。唐賦最明白簡易、至蘇子瞻、直文耳。然賦體日變、賦心益工、古不可優、後不可劣。」（訳：晋の張載、左思の賦は、漢の揚雄、司馬相如の賦とは異なっており、梁の江淹や庾信の賦に至ると更に異なる。唐の賦は明白簡易、内容本位となり、宋に至っては、賦は散文と殆ど変らなくなった。このように、賦の形式は時代によって変遷するが、一面、賦の心、賦の内容は益益工となり、古今による優劣はつけ得ないというのである。）とある[42]ように、袁宏道も胡応麟も、文学体裁の時代的変遷について述べていたが、しかし彼の「古不可優、後不可劣。」（訳：古今による優劣はつけ得ない。）という考え方は、文学退化観ではなく、むしろ文学進化論と唱えている。これは、胡応麟の上述の論と比べて見ると、両者の違いは明らかであろう。

袁宏道は、この文学進化論を根拠として、彼の反復古論を唱えたのである。

例えば、「錦帆集之四―尺牘」の「丘長孺」に、「夫詩之氣、一代減一代……詩之奇、之妙、之工……一代盛一代……然則、古何必高、今何必卑哉。」（訳：時代が下がるにつれて詩の気は下降するが、詩の奇とか妙とか工とかという点では、却って上昇する。だがら、決して古今によって何れが高く何れが卑いとは決められない）とある[43]。

要するに、胡応麟の「詩之格以代降也」（訳：時代が移り変わるにつれて詩の風格も退化する。）という論は、袁宏道の「一代盛一代」（訳：後の時代の詩は前の時代より盛

---

[41] 郭紹虞『中国文学批評史』pp.379－381．訳文は筆者による。
[42] 『袁宏道集校箋』巻 11,p.515．訳文は松下忠『江戸時代の詩風詩論』明治書院 1969 p.928 による。
[43] 同上巻 6 , pp.284－285．訳文は松下忠 pp.927－928 による。

になるはず。)[44]という反復古論とは違って、復古論を主張している。

胡応麟の復古論も、袁宏道の反復古論も、詩体・詩風を変遷させる「時の勢い」を論じているが、詩体・詩風が「時の勢い」によってどのように変遷するのかという点で、復古論と反復古論は区別できる。

一方、江村北海は『詩藪』の復古論をも取り入れたわけではない。彼はかつて『授業篇』を著わして李王の復古論を奉じた古文辞派に不満の意を表明したことと、『日本詩選』に非古文辞の詩が多く採られ、古文辞派に対する北海の反発は既に青木正児の「国文学と支那文学」、市古貞次の「漢詩文の世界」に指摘されている。

青木正児の「国文学と支那文学」には、「同時の江村北海も亦『授業篇』を著して古文辞派に不満の意を表明して居るが、北山のやうに峻烈で無い。此両人の著書は天明年間に爲されて居るが、略ぼ此頃からして将に風氣一轉せんとする兆候を示して居るものである。」[45]と述べられている。

また、市古貞次の「漢詩文の世界」では、「擬古主義を克服して自由な表現を回復しようとする試みは、古文辞派の勢力の比較的弱かった上方においてまず表面化した。京都の江村北海が編集した『日本詩選』には非古文辞の詩がたくさん採られていて、北海の古文辞派に対する反発をうかがわせる。」[46]と論じられている。

江村北海の反復古派の態度は、彼の「入江若水」の詩評にもうかがえる。

『日本詩史』巻之3に、「徂徠……その詩を論じて晩唐と為す。余を以てこれを観れば、その詩頗る宋の陸放翁に肖たり。ただ剪裁工を欠き、容易に筆を下す。故に動もすればこれを麤率に失ふ。惜しむべきのみ。然れども詩詩肺腑より出で、句句流動す。これを近時の諸人、口を盛唐に藉り、嘉靖七子の糟粕を勦窃し、飣餖陳腐なるものに較ぶれば、反りて観るべき有り」とある[47]ように、江村北海は明らかに復古派の嘉靖七子や、それを追従する近時諸人を退けている。江村北海の「詩詩肺腑より出で、句句流動す。」という詩評は、まさに反復古派の袁宏道の「性霊説」の主張である。

また、江村北海の文学史観は『日本詩史』の「凡例」に述べてある。「夫れ詩は体裁時に随ひ、好尚人に従ふ……孟子曰ふ、「物の斉しからざるは物の情なり」と。五色各その色を色とし、未だ嘗てその明為るを失はず。夫の玄と黄と、孰れを是として取り、孰れを非として捨てん。余詭言異説を為して以て門戸を建つることを好まず。この編論ずる所、中古は即ち中古を以てし、近時は即ち近時を以てし、京師は即ち京師を以てし、東都は

---

[44] 訳文は筆者による。
[45] 青木正児『青木正児全集』第2巻、春秋社 1969 p.376。
[46] 市古貞次『日本文学全史』(2版) 近世篇、学燈社 1979 p.300。
[47] 『日本詩史・五山堂詩話』p.102。

即ち東都を以てす。人人各その体を逐ひて評論す。冀はくは寸木岑楼の差無からん」[48]。

すなわち、江村北海も「三百篇・漢魏六朝・唐宋元明」の詩の変遷を述べるが、宋・元・明の詩文は、三百篇・漢魏六朝唐に勝るものではないという文学退化観は示していない。また、日本の中古、近世の漢詩についても論じているが、近時の漢詩が中古の漢詩に及ばないという見方は示していない。「中古は即ち中古を以てし、近時は即ち近時を以てす」という論[49]は、明らかに『詩藪』の「詩之格以代降也。」（訳：時代が移り変わるにつれて詩の風格も退化する。）の文学退化論と異なっており、『日本詩史』と『詩藪』との明らかな相違点と言えよう。

3．まとめ

以上、『日本詩史』と明の胡応麟の『詩藪』との影響関係を再検討した結果、一言で言えば、両詩話の史観を見ても、体裁を見ても、詩的主張を見ても、『詩藪』が『日本詩史』に与えた影響は、それほど大きくなかったと思われる。その理由は次の通りである。

(1)『日本詩史』と『詩藪』は、両者ともに「気運」の語を使っているが、「気運説」は胡応麟の独創ではなく、「気運」の語を使うことは、『詩藪』独自の特色とは言えないので、『日本詩史』が『詩藪』に負うものは大きいという主張は、成立しにくい。

(2)『日本詩史』と『詩藪』は、ともに詩の歴史を体系的に記述しているものであるが、両詩話の表現形式について、顕著な違いがあり、『詩藪』が『日本詩史』に影響を与えたとは考えにくい。

(3)『詩藪』の詩観は、王世貞の復古派の詩論と変わらず、袁宏道の反復古論に通じるものではない。『日本詩史』は、『詩藪』のような「気運説」の上に立てられた復古論を取り入れておらず、両詩話の「気運説」は必ずしも同じものではない。

なお、以上の再検討によって、『日本詩史』に与えた中国詩話からの影響の複合性が見られている。

大谷雅夫は、両詩話の間に「一対一」の対応関係を立て影響について論じている。つまり、詩の歴史を述べる中国詩話の『詩藪』に対して、それに相当する日本詩話の『日本詩史』がある、というようにである。そして、このような「一対一」の対応関係を前提にして、影響について推論しているのである。しかし、このような対応関係に基づく両詩話の間の影響は、成立し得ない。一つの日本詩話に複数の中国詩話、一時代の日本詩話に複数の時代の中国詩話が同時に影響を与えているので、「一対一」の形で詩話の影響を論じるのは疑問である。

---

[48]『日本詩史・五山堂詩話』pp.42－43。
[49] 同上 pp.39－40。

参考文献

青木正児『青木正児全集』全 10 巻、春秋社 1969。
大曽根章介編『日本古典文学大事典』明治書院 1999。
池田四郎次郎『日本詩話叢書』文会堂書店 1920－1922。
市古貞次『日本文学全史』2 版、学燈社 1979。
郭紹虞『中国歴代文論選』第 3 冊、上海古籍出版社 1980。
霍松林校『原詩』人民文学出版社 1979。
胡応麟『詩藪』中華書局上海編輯所 1962。
蔡振楚『中国文学批評史』中華書局 2005。
蔡景康編『明代文論選』人民文学出版社 1993。
清水茂編『日本詩史・五山堂詩話』岩波書店 1991。
周駿富編『列朝詩集小伝』台北明文書局 1991。
銭伯城校『袁宏道集箋校』中、上海古籍出版社 1981。
丁福保編『歴代詩話続編』全 3 冊、中華書局 1983。
陶秋英編『宋金元文論選』人民文学出版社 1984。
松下忠『江戸時代の詩風詩論』明治書院 1969。
中村幸彦『近世文学論集』岩波書店 1966。